
非忘却返却装置

夏氷/MDT128

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

非忘却返却装置

【Nコード】

N6872T

【作者名】

夏氷 / MDT128

【あらすじ】

自分本位な科学者の話。

科学者であるS博士は、長い間にわたって研究所の中でひとり開発に没頭した。

その研究には多額の資金が注ぎ込まれ、博士自身の有り金もほぼ底を尽きていた。

どれくらい前からであろうか、かつては助手もいたのだが、あまりに完成の見当がつかないのでみんな辞退していった。よって博士は今ひとりなのだ。

ある日、博士は声を上げた。

「やったぞ。遂に私の研究が実を結んだのだ」

そこには、控え置きゲーム機ほどの装置があった。先端には、アンテナのようなものが付いており、

側面にはランプやらボタンやらダイヤルだの、よくわからないものが幾数あった。

博士は、誰もいないのにひとりで装置の効果を復習した。

「この装置は、アンテナから特殊な電波を発し、私に関して何か借りがある場合、

一目散に私のもとに恩を返してくる。たとえば、その借りを忘れていてもだ。

また、ダイヤルで電波の範囲を調整できるから、その手の加減もできるというわけだ」

たしかに、博士は若い時に多くの人々に知恵や力を貸してきた。

しかし、自分本位なこのご時世、その恩を返してくれる者はほとんどいなかった。

だからこそ、博士はこの装置の開発を決心したのだった。

「さあ、まず試験的に、低範囲でやってみるとするか」

博士はダイヤルを少しいじり、ボタンを押した。
ランプが明滅し、機械的な音が響いた。

しばらくすると、ドアの呼び鈴が鳴り、博士はドアを開けた。

そこには、博士の旧友がいた。

「やあ。しばらくだったね。なぜか知らないけど、いつかに君に借りていたお金のことをふと思い出して、

返済しに来たんだ。君は覚えていないかもしれないけど、とにかく返すよ。停滞分の利子も少し含めておいたから」

そう言い、友人は紙幣を数枚渡し、お辞儀をして帰って行った。

「すばらしい。ここまで効果があるとは……」

その後も、かつて博士に恩恵を受けた人物が次々とやってきた。

「すごいぞ。私の研究は確実だったのだ」

博士は些か調子に乗り、電波の範囲と強度を最大まで強めた。

すると、博士は無意識のうちに立ちあがり、研究所を飛び出した。

「あれ、これはどういうことだ」

体が勝手に歩き出し、しばらくすると金融会社に辿りつき、

多額のお金を借り、再び歩き出した。

行き着いた場所は、とある一軒家だった。

訪問すると、ひとりの人物が出てきた。博士は早口で言う。

「私の研究の臨時支援金としてお借りしていたお金です。やっと研究が完成したので、それをお返ししに来たわけです」

「ああ、あの時の。私はすっかり忘れていました。どうもありがとうございます」

そしてお金を相手に渡し、相手は家に戻って行った。

我に返った博士はつぶやく。

「やれやれ、自分にも影響があるとは。まだまだ実用化は先のような…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6872t/>

非忘却返却装置

2011年10月9日04時13分発行